グリーンな栽培体系のためのきゅうり栽培概要（令和6年度）

キタクICTハウス部会

時期	作型	3月			4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月			12月		
		上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
作型	抑制作型													○		×		△		■	■	■	■	■	■	■	■	■			
														は種		接ぎ木		定植													

環境		日中	夜間	備考
適正温度	生育温度	22～28℃	17～18℃	最低15℃以上とする 最高35℃以下とする
	地温	20～23℃		最低15℃以上とする
	開花適温	18～21℃		13℃以下で開花停止 35℃以上で花質低下

主要な管理

1 ハウス環境チェックリストの実施

・新たなほ場の選定や栽培開始前・開始以降にチェックリストによりハウス環境をチェックする。
・栽培上、問題のあるハウスでは栽培の中止又は環境の改善を図る。

2 育苗

(1)品種の選定

・前作での発生や産地で発生の多い病気(うどんこ病、褐斑病等)に対する抵抗性品種を用いる。

(2)播種

・穂木と台木は同時まきとする。
・播種は定植　30日～35日前を目処に行う。

台木播種 ⟶ 穂木播種 ⟶ 接ぎ木 ⟶ 定植
穂木播種　2～3日　　7日　　15日

【播種から接ぎ木までの温度目安】

時期	地温	日中	夜間
播種～発芽揃いまで	27～30℃	27～30℃	
発芽揃い後～接ぎ木まで	24～25℃	25～27℃	18～20℃

【接ぎ木後の温度目安】

・日中の温度は24～25℃を目安とする。
・寒冷紗等の被覆により、日中の温度上昇を抑える。

3 ほ場準備

(1)土壌消毒

・前作で土壌病害やセンチュウ被害が大きい場合は、米ぬかやふすまなどの有機物を使用した土壌還元消毒を実施する。

(2)施肥

・栽培前に土壌診断を実施し、その結果に基づき、適正な施肥量を検討し、過不足のない施肥を行う。

4 定植

(1)栽植密度

・10a当たり1,000～1,200株程度が目安
・受光態勢のためには広畝の1条植えが望ましい。

(2)定植時の苗姿の目安

・定植適期の苗姿の目安は、本葉展開2.5～3.0枚時となる。
・接木苗は深植えすると穂木から発根し、 土壌病害に対する接木効果がなくなったり、地際から病気が入りやすくなったりするため、深植えに注意する。

(3)かん水

・定植後、株元かん水を数回行い、スムーズに活着させる。
・かん水は真水ではなく液肥とし生育ムラを防ぐ。

5 本畑管理

(1)かん水

・活着後は、土壌水分はやや高く管理し、乾燥させないようにする。
・その後は、葉数・葉長や日射量にあわせてかん水していく。
・土壌の乾湿の差を大きくしないように注意する(曇天が続く場合も乾燥しすぎないようにかん水する)。
・自動かん水装置や養液栽培システムを導入することで、こまめな水管理をしつつ省力化が可能となる。

(2)環境モニタリング及び生育診断に基づく施肥

・環境モニタリングや生育診断結果を踏まえて適正な追肥をすることで過剰施肥を防ぐ。

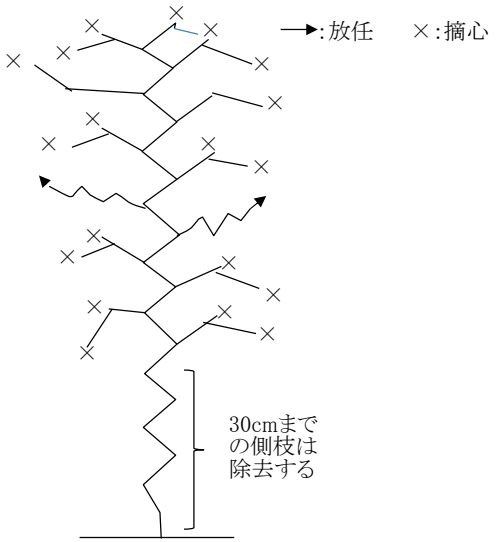
(3)整枝管理

ア　主枝摘心
・主枝は支線位置の18～20節で摘芯する。
・高さは160～180cmが目安となる。節数よりも高さを優先する。

イ　側枝摘心
・主枝の4～5節までの下位側枝は除去する。
・着果させる第1側枝は1節で摘芯する。中位節で力のない枝は放任して様子をみる。
・第2側枝も1節摘芯を基本とするが、力のない枝は放任する。
・その後の側枝は放任しするが、できるだけ上位の枝が優勢にならないように管理する。

ウ　摘葉
・展開後45～50日経過した葉・黄化葉・病葉は適宜除去する。
・1回あたりの摘葉枚数は3枚以内とする。
・草勢維持のため成長点は2本程度残しておく。

エ　草勢の判断(主枝摘心前)
雌花の開花位置から上位葉が6枚展開している状態がバランスがとれている。



(4)温度管理

・最高温度が28℃を上回らないように温度管理をするが、夏季はハウス温度が外気温以上にならないように換気や外気導入、遮光などを組み合わせる。
・最低温度は15℃を下回らないように保温や加温をする。
・秋の日の出後に温度が急激に上昇すると、気温ときゅうりの茎葉や果実との温度差が生じ、結露して病気が発生がしやすいため、温度上昇が穏やかになるように管理する。
・夏季は畦面、通路にマルチやわらなどを敷いて地温を下げる。

(5)病害虫防除

ア　環境モニタリング及び病害虫発生予察に基づく適期防除
・気温などの急な変化による結露の発生や多湿とならないように管理することで病害の発生しにくいハウス環境とする。
・発生予察情報を参考に病害虫の発生動向を把握することで病害虫が発生拡大する前に防除を実施する。

イ　静電付加ノズルによる薬剤散布
葉裏に薬剤がかかりやすくなり散布ムラが少なくなり、防除効果が高まる。